

〈参考資料：経済〉

『経済学と人間の心』・要約

宇沢 弘文 (2003) 東洋経済新聞社

*本書は日本でノーベル経済学賞に最も近づいた世界的経済学者宇沢 弘文先生を知ることが出来る本だ。先生が生涯をかけて伝えたかったこと、「**社会的共通資本**」については第3部で述べられている。先生はノーベル賞をもらうことなく他界 (2014.9) された。経済学で制度学派の考え方は余り勉強してこなかったのも、先生のゼミ生の1人だった、一方井先生に宇沢先生を知るやさしい本を2冊ご推薦いただいた。その1冊が本書である。環境を中心に簡単に要約した。 (文責 山田)

- ・『経済学と人間の心』(東洋経済新報社 2004年)
 - ・『経済学は人々を幸福にできるか』(東洋経済新報社 2013年) *
- (*これらの本は書店ですぐ手に入り、池上 彰の解説がある)

はしがき

今から50年前、河上 肇の『貧乏物語』を読んで、数学から経済学へ移った。「富を求めるのは道を聞くためである」(There is no wealth but life.) を、経済学を学ぶ基本的姿勢として、はじめはマルクス経済学を勉強し、その後、近代経済学に没頭した。しかし、ベトナム反戦にかかわってアメリカから帰国し、初心に帰って、「人間の心を大切にする経済学」を勉強し直すことにした。それまで経済学と直接関係ない公害、環境破壊の批判、反対運動に取り組むようになった。その過程で多く人と知り合い、学ぶことが出来た。**社会的共通資本**の概念を中心に据えて、人間の心を大切にする経済学の基本的考え方を明らかにする論考、エッセイ、書評をいくつか選んで収録した。(2003年4月)

第I部 リベラリズムの思想と経済学：・・・7

第1章 経済学と人間の心

昭和天皇と人間の心：昭和天皇は、戦後「人間天皇」として、国民の象徴としてお心を使ってこられた。これは決しておざなりなものではなく、心底深く誓われたものだ。ところが、森 喜朗首相は日本を「天皇を中心とする神の国」と発言、憤りを感じる。

文化功労賞受賞式で皇居に招かれ、超高層ビルを日本で初めて設計した武藤さんに対して、天皇は「地震の時、上に居る人間は大変だよ」と気さくに尋ねたが、彼は「建物は大丈夫です」と答えるだけだった。自分の番になり、経済学の話をしたが、あがってしまい、支離滅裂になっている時、「君は経済、経済というが、人間の心が大事だと言いたいのだね」と言われた。この出来事は(筆者にとっては)コペルニクス的転回ともいわれる出来事で、それから20年に渡って社会的共通資本の考え方を中心として、人間の心を大切にする経済学の形成に心をつくした。

ローマ法王と人間の心: 1990年8月、ローマ法王ヨハネ・パウロ2世に呼ばれて、1991年が「ルールム・ノヴァルム」100周年に当たるので、新しい「ルールム・ノヴァルム」作成への協力を依頼された。第1回の「ルールム・ノヴァルム」は20世紀に向かって、もっと良い社会をつくるための心構えを示したものだ。その基本的考え方は、サブタイトルで用いられた「**資本主義の弊害と社会主義の幻想**」という言葉で端的に示されている。この中で、レオ13世は、ごく少数の資本家階級が、富の大部分を私有して、労働者一般大衆は徹底的に搾取され、悲惨な生活を強いられている。多くの人々は、社会主義に移行することによって、貧困と社会的不公正は解決され、より人間的な調和の世界が実現すると思っている。しかし、それは単なる幻想にすぎないと警告された。

社会主義のもとでは、人々の自由は失われ、その人間的な尊厳は傷つけられ、市民の基本的権利は無視されざるを得ないことを指摘した。「ルールム・ノヴァルム」は、ヨーロッパ、アフリカ、中南米の国々に大きな影響を与え、カトリック系の新しい労働運動も始まった。

ヨハネ・パウロ二世の協力依頼に対して、筆者は躊躇なく、新しい「ルールム・ノヴァルム」は「**社会主義の弊害と資本主義の幻想**」こそ主題にふさわしいと述べ、21世紀への展望を考える時、制度主義の考え方こそ人類が直面している問題解決の重要な概念で、資本主義か社会主義かという経済学の考え方では解決できない。地球環境、医療、教育を中心とする社会的共通資本の考え方を大切にしなければならないと強調した。ヨハネ・パウロ二世からは「私に説教するのは、お前が最初だ」といわれ、後日、法王は筆者をザ・ブッディストと呼んでいたそうである。

第2章 森首相の「神の国」発言がもたらしたもの・・・20

「日本は天皇を中心としている神の国である」: これは2000年5月の神道政治連盟30周年記念祝賀会での発言で、首相発言の意味するところは、「神様を大事にしよう」との名目のもとに、天皇制という「国体」を復活させたいと活動して30年がたった、というもので、この発言は内外で問題となった。

森首相は天皇を倫理的、精神的、政治的中心とする戦前の日本の国体を肯定する考えで発言していることは明らかで、「国体」を守るために戦前の文部省は「国体の本義」の中で、日本の「国体」を守るために天皇への「絶対服従」を説き、自由主義、個人主義の考え方を排除した。「国体の本義」が「教育勅語」のよって立つ基盤を明らかにし、第二次世界大戦に突入していった。

3百万人近い軍人が戦死して敗戦を迎えたが、その時も国体護持が最優先で、一般市民の帰還などは後回しとされた。森首相は密室の中で総理大臣に決められた。無責任な神の国発言は、天皇・皇后両陛下がヨーロッパを訪問し、「民主的ルールを重んじる国」へ変わる努力をしている時に行われた。

自民党の首脳たちの「陰謀」：「教育勅語」は、1948年そのはたしてきた反社会的、非民主的役割に鑑み、衆参両院の合同決議として、これを廃止した。しかし、自民党首脳が神の国発言をする森氏を小渕氏の後釜に決めたことは、同じ戦前の国家観を持ち、放言癖のある森 喜朗氏を選んだ陰謀ではないか。

森首相の「神の国」発言がもたらしたもの：私は1年の大半を外国の大学や研究室で暮らしている。社会的共通資本の研究が完成の域に近づいた時、「神の国」発言があり、厳しい批判が相次いだ。スウェーデンのマスコミまでが批判した。アメリカのニクソン大統領がウォーターゲート事件で悪事を重ね、あるパーティーでポール・サミュエルソン教授にニクソン批判をしたら、教授は向きになって大統領を弁護した。アメリカには「おれは自分の犬を蹴飛ばしてもいいが、お前が蹴飛ばすのは許さない」という諺がある。しかし、森首相の発言は、外国の人も自由に蹴飛ばして欲しいと言う心境になる。

第3章 ファリアソンとグリカスの死を悼む：省略・・・36

第4章 苦悩の道を選んだ若き友人達：・・・43

アメリカ経済は1950年代を通じて繁栄の高原といわれる安定的な状態であったが、マッカーシー旋風の影響もあり、学生は政治的・社会的問題について無関心であった。しかし、ヴェトナムへの軍事介入がエスカレートするとともに反戦運動が展開され、学問的能力に優れ、社会的正義感の強い学生ほど、ベトナム反戦運動に深くかかわり、苦難の道を歩いて行った。

第5章 レオン・フェスティンガー を偲ぶ：省略・・・56

第6章 9・11テロとギボンの『ローマ帝国衰亡史』：・・・66

2001年2機の旅客機が世界貿易センターのビルに突入した。映画のような光景を目の前にして、エドワード・ギボンが書いた『ローマ帝国衰亡史』が脳裏をかすめた。ギボンは1737年にロンドン近郊の旧家に生まれ、若いころスイスのローザンヌで育った。『ローマ帝国衰亡史』全6巻は1788年に完成し、文学者として、歴史的哲学者としての不動の地位を築いた。

ローマ帝国はなぜ滅亡したか⇒西洋古代世界において、最大の版図を持ち、最強の軍隊に支えられ、すぐれた政治、経済、法律、土木技術を持った大帝国が滅亡したのはなぜだろう。衰頹過程に入ってから、辺境の反乱に対して、道理を書いた社会正義に反する弾圧を強力な軍隊を用いて行った。そして、一般民衆の支持を失い、滅亡していったとギボンは言う。ヴェトナム戦争にはじまるアメリカ帝国の非人道的、非倫理的行動は、ローマ帝国末期と余りにも類似点が多い。

第7章 ハーヴェイ・ロードの僭見（センケン・前提条件）と日本の官僚・・・72

ジョン・メナード・ケインズは、20世紀が生んだもっとも偉大な経済学者である。彼の基本的な考え方は、その主著『一般理論』に明快に述べられている。「現在資本主義制度における資源配分は必ずしも効率的でなく、所得配分は公正なものではない。経済循環のメカニズムも安定的ではない。・・・」このケインズの理性主義にもとづく政治思想的立場を、後の経済学者ロイ・ハロッドによって「ハーヴェイ・ロード（地名）の僭見」（プリサポジッション）と呼んだ。一般大衆より優れた知性、知見を持った人々が、イギリス全体の利益を考えて決定を行ってきた。しかし、大英帝国崩壊で虚構になる。

日本はこの役割を東大を中心とする高級官僚がになっていたが、経済大国の崩壊過程に入り、優れた知性、知見を持った高級官僚は消え去ってしまった。

「ハーヴェイ・ロードの僭見」は、植民地インドからの搾取によって財政基盤が作られていた。日本の高級官僚には同じような思い上がりがあり、東大法学部は、自らが国家権力の一部であると言う自意識に支えられているようだ。丸山 眞男は東大改革を諦めた。

第II部 人間的な都市を求めて：省略・・・83

第III部 環境と社会的共通資本：・・・113

第10章 社会的共通資本としての環境・・・115

ゆたかな社会を求めて：ゆたかな社会は次の基本条件を満たしていなければならない。

- (1) 美しい、自然環境が安定的、持続的に維持されている。その基本的条件は、
- (2) 快適で、清潔な生活を営むことが出来るような住居と生活的、文化的環境が用意されている。
- (3) すべての子どもたちが、それぞれの持っている多様な資質と能力を出来るだけ伸ばし、発展させ、調和のとれた社会的人間として成長しうる学校教育制度が用意されている。
- (4) 疾病、傷害にさいして、その時々における最高水準の医療サービスを受けることができる。
- (5) さまざまな希少資源が、以上の目的を達成するためにもっとも効率的、かつ衡平に配分されるような経済的、社会的制度が整備されている。

経済学はこのような課題を実現するためにどうすればよいかを考察する社会科学の1分野であると言っていい。

スミス、ミル、ヴェブレン：経済学の学問分野を確立したのは1776年に刊行されたアダムスミスの『国富論』（An Inquiry the Nature and Causes of the Wealth of Nations）に始まる。この題名の中でNationは、1つの国の国土とそこに住む人々の総体を指し、

統治機構を意味する State(国家)とことなる。思想的原点は 20 年前に書かれた『道徳的感情論』にある。人間のもっとも基本的な表現は、人々が生き、喜び、悲しむと言うすぐれて感情的表現であり、それを実現する市民社会は、健康で文化的な生活を営む物質的生産の基盤が作られている必要がある。そこで、20 年かけて『国富論』を書き上げた。

古典派経済学の本質を明快に解き明かしたのが、1848 年のジョン・スチュアート・ミルの『経済学原理』で、その結論的章に「定常状態」がある。定常状態はマクロ的に見るとすべての変数は時間を通して一定であるが、その中は、華やかな人間活動が展開されているユートピア的な定常状態を分析の対象としている。

国民所得、消費、投資、物価水準等のマクロ的な諸変数が一定に保たれるが、ミクロ的に見た時、華やかな人間活動が展開されているのが、ミルの定常状態だ。しかし、実現可能だろうか。これに答えを出したのがヴィブレンの社会的共通資本の考え方である。現代風にいえば持続可能な発展 (Sustainable development) の状態を意味する。

20 世紀は資本主義と社会主義の時代と言われ、2 つの経済体制の対立、相克が世界平和を脅かし、多くの悲惨な結末を生みだしてきた。19 世紀末と 20 世紀末は似ているが 21 世紀は制度主義の考え方が中心をなす。その源はヴィブレンの社会的共通資本の考え方である。

社会的共通資本の考え方：社会的共通資本は、1 つの国や特定の地域に住むすべての人々が、豊かな経済を営み、すぐれた文化を展開し、魅力ある社会を持続的、安定的に維持することを可能にするような社会的装置を意味する。社会的共通資本は、**自然環境** (大気、水、森林、土壌等)、**社会的インフラストラクチャー** (道路、交通機関、上下水道、電力・ガス等)、**制度資本** (教育、医療、金融、司法、行政等) の 3 つの大きな範疇に分けて考えることが出来る。これらは、市場的基準に支配されてはならないし、官僚的に管理されてはならない。

自然環境とは：具体的には、森林、草原、河川、湖沼、海岸、海洋、水、地下水、土壌、大気などを指すが、そこに生息するさまざまな動植物などを 1 つの総体として捉える概念である。その再生は、森林再生などエコロジカルな要因によって規定されている。例えば漁場を考えると、魚の再生プロセスは、魚の餌となるプランクトン、小魚の存在だけでなく、水温、海水の流れ、沿岸のエコロジカルな諸条件、場合によっては上流の森林の状態によって左右される。自然環境を自然資本と捉える時、自然環境は、規模の経済、外部 (不) 経済等の経済理論における概念と本質的に異なる。ある水準までは外部経済が働くが、その水準を超えた時は、外部不経済の現象がみられると考えてよい。

自然環境と人間活動：留意しなければならないことは、人間が歴史的にどのようにかわってきたかである。「文化」という時、伝統的社会における文化と近代社会における文

化は意味が異なる。環境問題を考える時、宗教は中心的な役割を果たす。宗教は、自然を作り出し、自然を支配する超人間的力の存在を信じ、聖なるものを敬う。伝統的社会は、自然、宗教、文化を総体として捉え、自然資源に頼り、歴史的な経験を通じて知識が形成され、世代から世代に継承され、自然資源の持続的な利用と保全が図られて来た。

人間の移動が自由になると文化、宗教、環境の乖離は拡大していった。近代キリスト教の教義が、自然の神聖を汚し、人間の意思による自然破壊、搾取に対してサンクションを与えた。ルネッサンスは、人間の復興であったが、自然の凋落を意味していた。近代思想の発展は、人間の優位を確立し自然の従属に拍車をかけた。

2つの国際会議の意味：環境と経済に関する2つの国際会議が開催された。1つは1972年、ストックホルムで開催された第1回環境会議、2つ目は1992年のリオ・デ・ジャネイロでの第3回環境会議である。ストックホルム環境会議の主題は公害問題で、これまでの産業活動に対して反省を迫り、公害規制の施策が実行に移されていった。イギリスや東欧諸国の工業化で酸性雨がスウェーデンの1万の湖沼の大半をダメにしたと言われている。

1992年のリオの環境会議の主題は、地球規模における環境汚染、破壊についてであった。地球温暖化、生物多様性の喪失、海洋汚染、砂漠化などの問題である。熱帯雨林の急激な消滅や多様な生物種が人類の歴史に残してきた役割は大きなものがある。

第11章 地球温暖化で何が起こるか：・・・134

スタンフォード大学の生物学教授で、気候物理学を専門とするスチーブン・シュナイダー教授は『地球温暖化の時代』などの著書をはじめとする啓蒙活動に携わってきた。

前例のないグローバル・チェンジ：本書はまず、地球と生命がどれだけの年月を経て、現在の形にまで変化してきたのかを考える。「ガイア仮説」が現在もっとも有力な仮説である。地球上の生命は、気候によって大きな影響を受ける。

理性的な考え：地球が現在経験しつつある気候のグローバル・チェンジは前例のない規模を持つということである。しかもこの変化は人間の活動によってもたらされつつある。これを生半可な知識で批判する経済学者もいる。これに対して、シュナイダー博士の対応は極めて理性的である。

〈地球温暖化とは：この項は『社会的共通資本』には書かれてあるが、本書では省略されている〉1980年代の終わり頃から現在にかけての地球環境問題のうち、経済的、社会的な観点からもっとも重要な意味を持つのが、地球温暖化である。地球の平均気温は約2,000か所の観測点で測定され、決められていく。太陽から放射される電磁波のうち、波長の短い紫外線はオゾン層によってほとんど吸収され、地表に達しない。オゾン層のおかげで生

物は海から陸に上がることが出来た。

可視光線は地球に到達するが、赤外線は温室効果ガスによって一部吸収される。大気中に存在する赤外線を吸収する化学物質によって、地球は平均気温 15 度前後が保たれる。温室効果ガスは、水蒸気、二酸化炭素、メタンガスなどであるが、もっとも重要な役割を果たすのが二酸化炭素である。

大気中の二酸化炭素は、産業革命前までは安定的に維持され、約 6,000 億トンであった。280ppm の濃度が保たれて来たが、現在は 7,500 億トン、350ppm の濃度になり、過去 0.3~0.6℃上昇したと推定される。現在のペースで地球温暖化が進めば、21 世紀の終わりには 2~4℃上昇すると考えられている。

第 12 章 地球環境問題に如何に対処するか：・・・140

気候のグローバル・チェンジ：地球環境に大きな変化が起きつつある。ハリケーン・サイクロン・台風がいずれもこれまでとは異なる強さとルートを持って頻繁に発生する。産業革命以降の温室効果ガスの濃度は 50% 上昇した。

二つの国際会議：重複になるので省略

地球環境問題の倫理的意味：新古典派経済学の非人間的エピソードを紹介する。アメリカの製薬会社は、アマゾンの熱帯雨林に住む長老やメディシマンから熱帯雨林の中に生息する動植物、微生物、土壌が、どのような疾病、傷害に役立つか聞き出し、それを本国に持ち帰り、分析して新薬を合成し、巨額の利益を上げている。そこで、ブラジル政府は、製薬会社に特許料を支払う制度を作ったが、アマゾンの長老たちは、受け取りを拒否した。自分たちがもっている知識が、人々の幸福に使われたらこんなうれしいことはなく、それをお金に替えると言うさもないことはしたくない、ということが拒否の理由だった。あくどく利潤を追求してやまない現代文明の病理的現象がそこには存在する。

地球温暖化と京都議定書：地球温暖化は、20 世紀文明が生み出した病理的的症状と言ってよく、1997 年のこの問題に対する国際会議・京都会議は、アメリカの強い反対で炭素税は取り上げられなかったが、1990 年のレベルからの削減目標が決められた。炭素税を使って 2000 年の二酸化炭素の排出量を 1990 年まで削減するのに、アメリカはトン当たり 20~30 ドルで済むが、日本は 200~300 ドルかかる。日本は 1973 年のオイルショックで、省エネに大変努力を費やしたが、アメリカは怠けていて、得をしたことになる。

地球温暖化のための国際協定：大気中の二酸化炭素は速い速度で地球を循環するが、アメリカの経済学者が提案している炭素 1 トン当たり税をかけるのは、公平性を欠き良くない。日本は 1 トン当たり 240 ドル、アメリカは 530 ドルで問題ないが、国民所得が低いインドネシアは 30 ドル、フィリピン 30 ドルと高い割合を占めることに

なる。その国の1人当たりの国民所得に比例させる制度にすべきだ。そうすると、日本、アメリカは320ドルだが、インドネシア2ドル、フィリピン3ドルとなる。

スウェーデンの温暖化対策：世界で最初に炭素税を導入したのはスウェーデンである。スウェーデンは美しい湖と森に囲まれている。1991年に炭素税を導入した。二酸化炭素排出量トン当たり250クローネ(4千円)、ガソリン1リットル(9円)と高率だった。1993年に国際間の競争という観点から大幅な修正がされた。

大気安定化国際基金：炭素税率を、一人あたりの国民所得に比例させる比例的炭素税の制度は、地球大気の安定化に役立つだけでなく、先進工業国と発展途上国との間の不公平を緩和すると言う点で効果的である。この制度のもとでは、化石燃料の消費に対して、排出される二酸化炭素の量に応じて炭素税がかけられると同時に、森林の育成に対して、吸収される二酸化炭素の量に応じて補助金が交付される。各国政府は比例的炭素税からの収入から育林に対する補助金を差し引いた一定割合を大気安定化国際基金に供託する。発展途上国は、このお金を地球環境を守るために使うことを原則とする。しかし、発展途上国に対しては、大気安定化国際基金の配分金の使い方に対して、制度的条件を設けるべきではない。

第13章 「緑のダム」方式で川辺川を守ろう：・・・154

世界中に日本ほど、美しくゆたかな自然を持った国は少ない。その繊細な自然を象徴するのが、緑ゆたかな森林と清冽な河川である。これをダムと自動車道路が破壊して行く。川辺川ダムは尺鮎が棲むゆたかな自然が残された河川だが、国土交通省は総事業費4000億円でダムを作ろうとしている。今望まれることは、日本古来の治水システムで水害を防ぐ「緑のダム」方式を実行に移すことだ。加藤清正にはじまると言われる、日本古来の河川工法は素晴らしい。吉野川の第10堰が世界から注目されている。250年間、一度も決壊したことはない。

第14章 「長野モデル」を求めて：・・・159

「脱ダム」宣言：長野県知事、田中 康夫が平成13年2月20日に出した宣言で、コンクリートのダムを造るべきではないと言うことである。自然環境は過去からのその優れた形をそのまま将来世代に引き渡さなければならない。長野県は日本の背骨に位置し、峻嶒な山々に囲まれ、豊かな森林や清冽な溪流など自然豊かで、これをダムで壊してはならない。

「五直し」— 「こわす」から「創る」へ：「脱ダム」宣言は、田中知事の公共事業全体に対する県政の基本理念を「長野モデル」として述べたものであるが、県議会は平成14

年7月、田中知事不信任案を可決した。そこで、知事は議会解散の道を選らばず、失職して再度知事に立候補し、圧倒的多数で再選された。「五直し」は、①水直し、②森直し、③道直し、④田直し、⑤まち直しからなる。・・・以下省略。

第15章 スリランカの溜池灌漑と空海：・・・185

日本の農業は、その生産性の高さにおいて、世界で最も優れたものの1つであった。(特に1950~1960年代)。日本の農業を支えてきたのは、コモンズの原則に従って管理されて来た灌漑システムであり、その元は、空海であった。空海は遣唐使として中国に居た時に、当時世界で最も優れていたスリランカの灌漑システムを学んだ。空海は帰国するや朝廷に願い出て、隠岐に帰り、満濃池の大修復に成功した。そして、全国に溜池灌漑に関する工学的知識とその社会的管理に関する制度を広めた。

1994年スリランカのコロンボを訪問し、学会会議の創立50周年式典で、基調講演を行った。独立して47年になるが、イギリス植民地時代の傷跡は深く、今もスリランカ経済は、大きな困難を抱えている。2000年にも及ぶすぐれた灌漑技術に支えられた農業国は、今、食料と貧困に苦しんでいる。イギリスは全島に渡って森林を切り払い、農地をつぶして茶とゴムのモノカルチャーの国を作り搾取した。現在、スリランカ政府は農業の多様化と森林の育成に努めており、かつての世界最高水準のスリランカ水利文明は、必ず花が咲くであろう。

第IV部 学校教育と人間の心：目次のだけで省略・・・193

第16章 カントの『純粹理性批判』と数学・・・195

第17章 魚に泳ぎを教える：・・・202

第18章 教師と生徒が協働作業を進める場：・・・211

第19章 リベラリズムの学校教育法・・・218

第20章 大学改革の名のもとに・・・229

第21章 福沢諭吉とビール・・・243

第22章 ケンブリッジで・・・253

第23章 福祉の制度化のあやうさ・・・261

追記：『現代思想』青土社は、3月臨時創刊号(2015 Vol.43-4、2015.2.15 発行)を刊行し、総特集 宇沢 弘文 人間のための経済学を編集した。25名ほどの著名な作家、経済学者、評論家等が宇沢 弘文の功績をたたえている。対談では内橋勝人+神野直彦、宮本憲一+西谷 修、エッセイでは、柄谷行人 平川克美 田中康夫が生前の業績を振り返り、讃えた記事を載せている。

以上